

応神天皇 恵我藻伏岡陵の採集品について

はじめに

現在、陵墓課では、歴史・考古学関係 16 学協会からの要望に応じて年 1 回程度の陵墓への立入観察の機会を設定している。令和 4 年度は、応神天皇陵で 1 回目を実施したところであるが、観察予定箇所は少なからず草に覆われた状態にあり、墳丘表面の観察に支障となることから、第 1 段斜面の各所と造出周辺について事前に草刈を行った。その結果、東造出の裾部で幾つかの埴輪を採集したので、報告を行いたい。また、かつて東造出上面では、平成 10 年に墳丘内の巡回中に土製品を採集したことがあることから、この機会に併せて報告を行いたい。

1. 採集箇所について

造出（第 15 図） 造出は、くびれ部の東西両側に取りついている。東造出は、上面が第 1 段テラス面とは段差があり現状で約 1 m 低くなっている。周濠水面からの比高は、現状で約 7 m である。西造出は前方部側面の崩落による土砂に覆われているが、第 1 段テラス面との高低差は東側と同様である。また、東西の造出は同規模・同形態ではなく、陵墓地形図や世界遺産登録推進にかかる事業で行われた航空レーザ測量の成果などからも異なる構造であることがうかがえ、世界文化遺産推薦書（37 頁 図 2-11）には、それが反映された墳丘復元図が掲載されている⁽¹⁾。

今回報告する資料が採集されたのは東造出である。現在、造出上面には埴輪列などの存在を示すような目立った兆候は認められないが、裾部では転落したと考えられる埴輪片が認められる状況である。陵墓地形図を見る限りでは、造出の墳丘への接合部の屈曲は緩やかであるが、それは相当の堆積土があることによると観察され、特に後円部との接合部については、深い谷状地形が形成されていたのではないかと考えられる。

採集位置（第 15 図） 今回採集した埴輪片は、東造出の北東隅付近で確認されたものである。造出裾から約 1.5 m～2 m 離れた場所である。位置関係からすると、造出上面から転落してきたものであろう。採集箇所には転落してきたと考えられる葺石が堆積している状況が観察され、下にはさらに多くの埴輪片が転落していると考えられる。

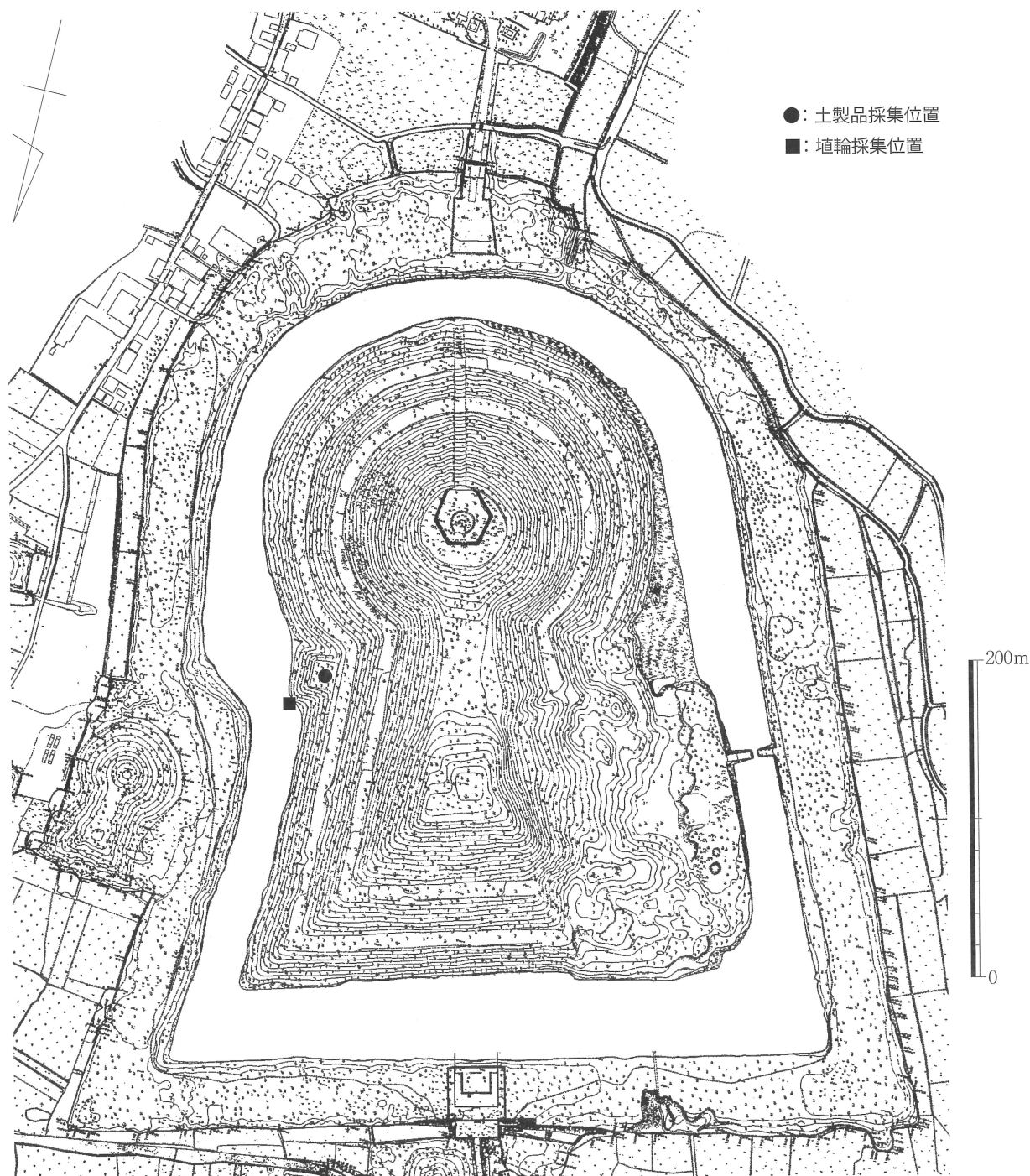
土製品は、南北約 18 m、東西約 14 m の長方形を呈する造出上面のほぼ中央で採集されたものである。

2. 採集品の所見

先述のとおり、円筒埴輪片、蓋形埴輪片と土製品を採集している。円筒埴輪片 4 点、蓋形埴輪片 2 点、土製品 1 点である（第 16 図、図版 23）。

【埴輪】

円筒埴輪 1 は、突帯を挟んで上下の範囲が残る胴部の破片である。少なからず摩滅が進んでいる。外面は、2 次調整として突帯の上方下方ともヨコハケがみられるが、1 次調整は確認できない。ヨコハケの静止痕は不明瞭である。内面は、指頭圧痕がみられるほか、指ナデ調整が施されており、ハケメはみられない。色調は明黄褐色を呈している。胎土には径 1～2 mm の砂粒を多く含み、もう少し大きな砂粒も少し認められる。2 は、突帯を挟んで上下の範囲が残る破片である。外面は、突帯より下で 1 次調整のタテハケがみられ、上では 2 次調整のヨコハケがみられる。突帯より上方では、残存範囲内で 1 次調整の痕跡はみられない。また、ヨコハケの静止痕は不明瞭である。内面は、指頭圧痕のほか左上方への指ナデ調整が施されている。ハケメはみられない。色調は茶褐色から明赤褐色を呈している。胎土には直径 1～2 mm の砂粒を多く含み、3～5 mm に及ぶ砂粒も少量認められる。本破片は、外面の調整痕の特徴から第 1 段突帯を含む底部から胴部にかけての破片と考えられる。3 は、突帯を挟んで上下の範囲が残る胴部の破片である。外面は、突帯の上方は 2 次調整と考えられるヨコハケがみられるが、下方は摩滅のため不明である。確認できるヨコハケも

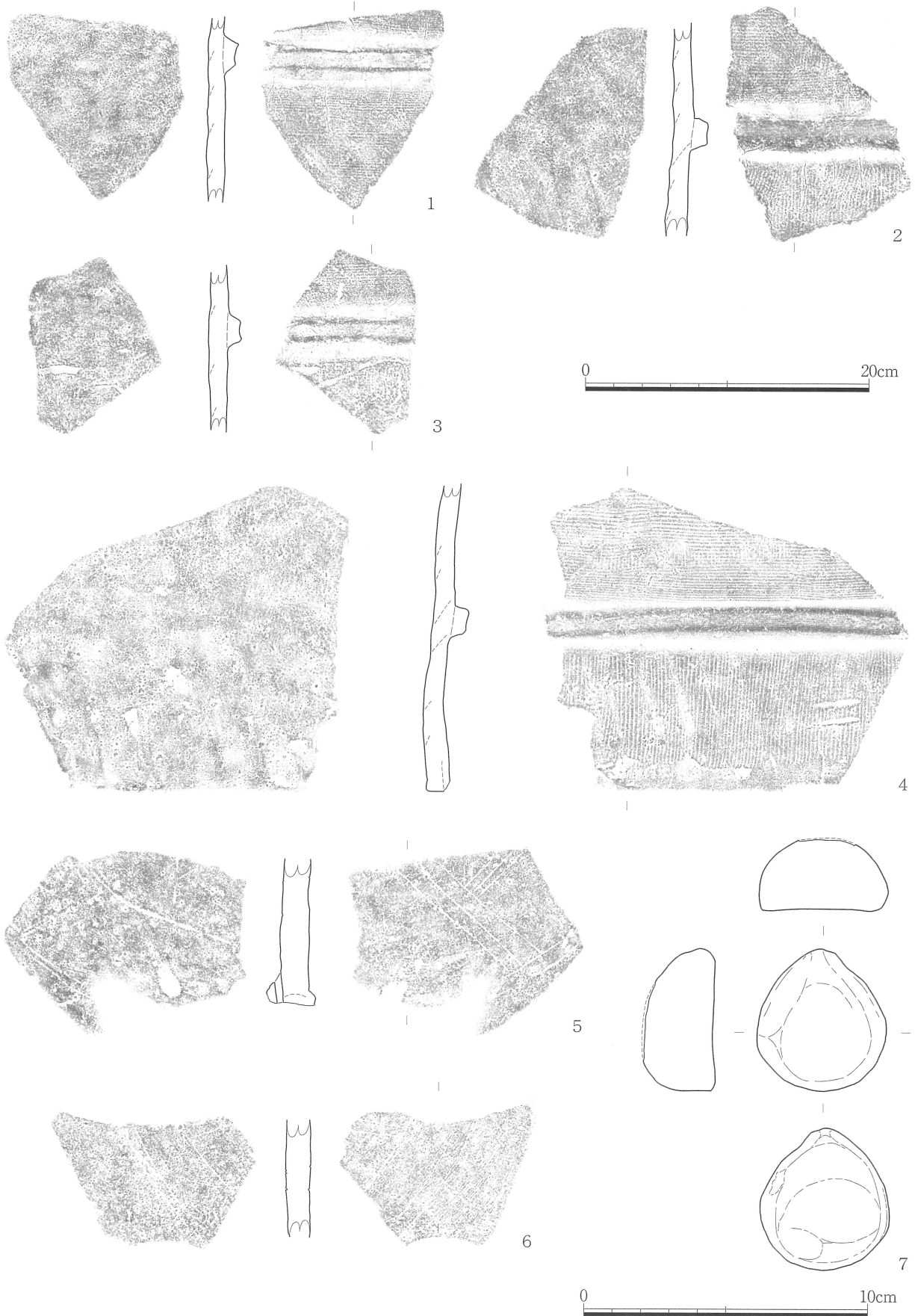


第15図 恵我藻伏崗陵 埴輪・土製品採集位置図 (1/4,000)

静止痕は不明である。内面は、指頭圧痕と指ナデ調整がみられる。ハケメはみられない。色調は明黄褐色を呈している。胎土には、直径1~2mmの砂粒を多く含み、3~5mmに及ぶ砂粒も少量認められる。4は、底部の破片である。底部から突帯下端までは11cmである。外面は、第1段が1次調整のタテハケ、第2段が1次調整のタテハケの後、2次調整のヨコハケである。ヨコハケの静止痕ははっきりしない。内面は、一部摩滅が進んでいる。指頭圧痕と上方への指ナデ調整が認められる。ハケメはみられない。色調は茶褐色を呈している。胎土には、直径1~2mmの砂粒を多く含み、3~5mmに及ぶ砂粒も少量認められる。

各破片とも黒斑はみられず、おおむね共通した特徴をもっているといえよう。

蓋形埴輪 5・6は蓋形埴輪の立飾りの破片である。5は、立飾りのうち傘部に差し込む基部円筒付近であ



第16図 恵我藻伏岡陵 採集埴輪・土製品実測図 (1~6 埴輪：1/4 7 土製品：1/2)

る。両面とも摩滅が進んでおり、線刻は不明瞭となっている。調整痕も指ナデ以外は不明で、現状でハケメはみられない。飾り板と基部円筒の接合部には、表裏ともに穿孔が認められる。色調は茶褐色を呈している。胎土は、直径1～2 mmの砂粒を多く含み、3～5 mmに及ぶ砂粒も少量認められる。6は、立飾りの外縁に表現された鱗飾りの一部にあたると考えられる。片面は摩滅が著しいが、反対面にはハケメが明瞭に残る。色調は茶褐色を呈している。胎土は、直径1～2 mmの砂粒を多く含み、3 mm程度の砂粒も少量認められる。

【土製品】

7は土製品で1点を採集している。完形品であり、最大長5.05 cm、最大幅4.5 cm、最大厚2.6 cmを測る。指オサエと指ナデにより製作されており、平面形は、図示した上方がすぼまり、尖るような形態を示す。下方は半円形を呈している。断面形は、上面は饅頭様の丸みを帯びるが、下面は中央部分がやや凹みをもつ平坦面をなしている。色調は赤褐色～茶褐色を呈しており、焼成状態は比較的良好であるが、上面を中心に表層が所々剝離している。胎土は、直径1～2 mm程度の砂粒を多く含み、もう少し大きな砂粒も少量含んでいる。何かに貼り付けた痕跡や線刻などは認められない。

本資料は、その形態的特徴やサイズ感からは栗を連想させるが、そうであるかどうかは明らかではない。いずれにしても、他の古墳の造出でも確認されている供献品を模造した土製品の一種と考えてよいだろう。

(清喜裕二)

註

- (1) 文化庁文化財部記念物課『百舌鳥・古市古墳群：一古代日本の墳墓群一』（百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産推薦書）、日本、2018年。



1 東造出上面（北から）



2 東造出上面と墳丘第1段テラス面の段差（南から）



1 東造出と後円部間の谷状地形（西から）



2 東造出と後円部間の谷状地形（東から）



1 東造出と前方部の屈曲（東から）



2 東造出裾 埴輪採集箇所（北から）



1 埴輪 円筒胴部 (左から1～3)



2 埴輪 円筒底部 外面 (4)



3 埴輪 円筒底部 内面 (4)



4 蓋形埴輪 立飾り (左から5・6)



5 蓋形埴輪 立飾り基部の穿孔 (5)



6 土製品 上面 (7)



7 土製品 下面 (7)



8 土製品 側面 (7)